

文章・談話研究

立川 和美

2021年は、文章・談話において具体的な言語要素がどのように機能しているのかを深く掘り下げる研究と、様々な視点からのアプローチをまとめて総合的に文章・談話の姿を明らかにする研究といった双方向から、充実した成果が発表された。本稿では、こうした中で稿者が表現学や表現論に深く関わると感じた研究を紹介したい。

まず前者としては、高崎みどり『テキスト語彙論 テキストの中でみることばのふるまいの実際』(ひつじ書房)がある。ここでは、「テキスト構成」に寄与する語として「テキスト構成語」を仮設し、テキスト展開に関わる語彙的結束性などの概念について、漢語や外来語、指示語の機能などから分析が行われている。文脈の流れの中での語彙の働きが多角的に考察されており、示唆に富んだ研究である。

後者としては、ポリリー・ザトラウスキー編『五感で楽しむ食の日本語』(くろしお出版)がある。日本語教育研究と関わりながら、「食」をテーマとした文章・談話が、表現論や文体論などの観点から分析されており、本領域における多くの方法論とその成果を示した研究書として注目される。具体的には、味や香りを表すオノマトペや、食の評価を示す言語(非言語)行動などに関する調査が収められ、非常に興味深い。

同様に、李在鎬編『データ科学×日本語教育』(ひつじ書房)でも、学術的文章の構造や接続表現、文章の分かりやすさなど、多種にわたる計量的な分析が行われている。2020年以降、国立国語研究所等による大規模コーパスの整備が進められているが、そうしたデータを活用した研究における理論の展開を意図した意欲的な研究書である。

この他、日本語の文章・談話に特有のジャンルを扱った研究として、雑誌『日本語学』40(1)(明治書院)では、「ポップカルチャーの日本語」という特集が組まれた。これまで標準的な日本語を対象とした談話研究においても、「役割語」や「ヴァーチャル方言」、「キャラ語」など多くのユニークなスタイルを形成する要素が提示されてきたが、ここでは漫画やライトノベル、落語などのポップカルチャーというジャンルに特化した文章・談話分析が行われている。こうした日本語の文章・談話に特有のジャンルに関する研究は、今後、活発化するものと考えられる。

これまでの成果を発展させた研究としては、小説テキストを分析する上で重要な「視線」の概念を用いて、テキスト参加者の立場からその表現と理解の仕組みを丁寧に議論した野村眞木夫「物語テキストにおける視線の表現」『上越教育大学研究紀要』40(2)(pp.559-567)や、ニュース談話に対して「読みことば」という位置づけを行い、戦前・戦中のニュース分析なども含めて広く観察した井上裕之『ニュースの談話構造の総合的研究』(ココ出版)など、着実な積み上げも多くみられた。

文章・談話の研究方法は非常に多面的であるが、COVID-19の影響によるオンライン言語の広がりなどから、今後は扱う対象も多様化が進むであろう。新たな研究成果と、更なるその深化・拡充が期待される。最後に、稿者の力不足による不備があることをご寛恕願う次第である。

(流通経済大学)